

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 1 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010 -2012

課題番号：22653125

研究課題名（和文） ナラティブ(語り)の発達アセスメントと支援プログラム開発

研究課題名（英文） Development of assessment of narrative development and intervention program

研究代表者

長崎 勤 (NAGASAKI TSUTOMU)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：80172518

研究成果の概要（和文）：近年の発達心理学・認知科学の知見を生かしナラティブの主要な要素である自分自身の経験を語るパーソナル・ナラティブと架空の物語を語るフィクショナル・ストーリーの発達水準を包括的にアセスメントするための基礎的な方法と、その発達を促進する支援プログラムを開発した。また、事例に適用し、妥当性を検討した。

研究成果の概要（英文）：The method of assessment and intervention program of personal narrative which state self-experiences and fictional narrative depend on recent developmental psychology and cognitive science were developed. The assessment and intervention program were adapted for cases and discussed appropriateness of the method of assessment and intervention program.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	0	900,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,900,000	300,000	2,200,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：軽度発達障害

1. 研究開始当初の背景

発達障害児では「自分の経験や知っているストーリーを他者に分かりやすく伝える力＝ナラティブ(語り)」の力の障害が指摘されているが、ナラティブをアセスメントする方法が日本ではまだ開発されていない。ナラティブの力は「読み・書き」だけでなく、「他者の感情の理解」や「心の理論」の前提としても重要といわれてきている。アセスメントのためには、出来事と出来事を時間的、因果

的に関連づけ、更に接続詞等によって言語化することが必要である。そこで、幼児期後半から、学齢期の子どもを対象に、経験したことや連続絵などのナラティブをアセスメントする方法とそれに基づく支援プログラムを開発する。読解力低下については、「読み・書き」レベルでの検討が多いが、近年の発達心理学の成果からは、「聞く・話す」レベルからの検討が必要で、特に自分の経験を論理的にまた自己・他者の心的状態も含めて他者

に説明する「パーソナル・ナラティブ」の活動支援が「読み・書き」の支援の基盤として必要不可欠である。しかし、「聞く・話す」から「読む・書く」への連続的移行の支援を体系的に扱った教育課程や支援プログラムはわが国にはない。

2. 研究の目的

本研究は、近年の発達心理学・認知科学の知見を生かし、パーソナル・ナラティブとフィクショナル・ストーリーとを包括的にアセスメントし、その発達を促進する支援プログラムの開発が目的であり、かつ、「読む・書く」への移行にも対応するプログラムである。

3. 研究の方法

【研究 I-1】: 3~6 歳の典型発達児(第 1 研究)、6~8 歳の高機能自閉症児を対象として、直前のケーキ作りについての母子会話場面を分析した。具体的には言及した要素数や節間の関連型、接続表現の使用、母親の質問の形態などについて分析し、典型発達児の発達過程、高機能自閉症児の特性について検討した。

【研究 I-2】 児童期後期のフィクショナル・ストーリーとパーソナル・ナラティブにおける、健常児の行為間の因果的関連付けの発達の变化、及び発達障害児の特性について検討することを目的に、第 1 研究では小学校 4~6 年生の健常児のナラティブの分析、第 2 研究では小学校 4~6 年生の発達障害児群と月齢でペアリングした健常児群でナラティブの分析を行った。基礎分析として Causal networks 分析を行い、行為間関連付けの量では平均連鎖数と 1CU から出ている連鎖数、行為間関連付けの質では行為間の距離と話の途切れについて分析を行った。系列絵の内容の出来事要素間の関連付けの分析を通し、フィクショナル・ストーリー構造のアセスメント方法を開発することを目的に、小学校 1 年生から 6 年生の各 10 名を対象に、4 枚の連続絵、5 枚の連続絵の内、4 枚目が欠如しているもの、1 枚の絵について物語ることを求めた。

【研究 I-3】 ナラティブの発達アセスメント・ツールの開発のための基礎研究

小学 4 年生 400 人に 2 種類のフィクショナル・ストーリーを語ってもらい、節間関連付けによる分析を行い、4 年生内の個人差について分析した。

【研究 II】: アセスメントに基づいて、「分かりやすく伝える」仕方を支援するプログラムを開発する。具体的には、アセスメントに基づき、出来事間の関連づけの目標を選択し、そこに焦点を当て、製作や活動の経験を写真や図版を手がかりにし表現するプログラムを開発する。

【研究 III】: アセスメントとプログラムを事例に適応した実験的支援を行い、その有効性を検証する。

4. 研究成果

【研究 I】 ナラティブのアセスメント方法の開発のための基礎研究

自分の経験(パーソナル・ナラティブ)とフィクショナル・ストーリーを「人に分かりやすく伝える」力のアセスメント方法を開発する。

【研究 I-1】 典型発達児のパーソナル・ナラティブの発達過程の分析

第 1 研究では 3 歳では複数の出来事について自発的に言及したり、それらを何らかの方法で関連付けたり、接続表現を使用することが少なかった。4 歳以降では複数の出来事に言及するようになり、それらの出来事の時間的な関連付け、接続詞や接続助詞の使用が増加した。さらに 5、6 歳になると時間的な関連付けだけでなく、「因果」「逆」「比較」など様々な方法で出来事を関連付けるようになり、接続詞、接続助詞以外のことばによる接続表現が増加した。この結果と先行研究の知見とを重ねて考えると、3 歳では複数の出来事を関連付けて述べるのが少ない。そして、4 歳では何らかの方法で複数の出来事を関連付けるようになり、接続詞や接続助詞の使用頻度が増加する。さらに 5、6 歳では出来事間の関連付け方が多様化し、接続詞や接続助詞以外の接続表現が増加するという発達過程が示唆される。また「複数の出来事を関連付けるようになる」という 3 歳から 4 歳への移行は異なる文化や異なるジャンルのナラティブ、言語以外の自己認知研究などの領域でも確認されており、この背景には認知能力の質的転換があると考えられる。また 4 歳から 5、6 歳への変化については関連付け方が多様化するという点では藤崎(1982)、長崎(2000)と一致していたが、各年齢で特徴的に見られる関連付け方は一致していなかった。これに関しては、会話状況の違い、特に語り手と聞き手が語られる内容について共有している知識の違いがナラティブの構造に違いをもたらしたためと考えられる。経験の起きた場所や時期や参加者、すなわちエピソードの背景情報について聞き手が知らない場合に、子どもがいかにか語るのかは今後の研究課題として残されるが、パーソナルナラティブの構造を評価する際に会話参加者が何を前提としているかについて考慮することの重要性、パーソナルナラティブを支援す

る際に目標とする発話を促すために会話の前提条件をコントロールすることの有効性が示唆されたといえる。健常児の直前の経験の報告における、出来事の相互関連付け発達過程の分析を通し、パーソナル・ナラティブのアセスメント方法の開発を目的とし、3歳～6歳の健常児とその母親、各12組を対象に、子どもは実験者と一緒に「ケーキ作り」をし、子どもが「ケーキ作り」の経験を、それを見ていなかった母親に説明し、その会話場面を分析した。発話は、「イベント索引化モデル」によって、出来事間の関連づけの仕方を時間性・意図性・因果性・行為主体性・空間性という5つの次元によって分析した。その結果、3歳～6歳にかけて、空間的→時間的→因果的→意図的といった関連づけの発達過程が認められた。

第2研究では、6～8歳の高機能自閉症児を対象としたが、言及した要素数や節間の関連型、接続表現の使用などの分析結果は典型発達の6歳児と同程度あるいはそれ以上の遂行水準にあった。したがって、言語能力の高い高機能自閉症児は、出来事を「時間」「因果」「逆」などの多様な方法で相互に関連付けたり、接続詞、接続助詞、その他の接続表現を使用することには困難性を持たず、少なくとも典型発達の6歳児と同程度の水準にあることが示唆された。また先行研究との比較から、自閉症児が経験からの経過時間が長いエピソードに関する語りに特に困難性を持つ可能性も示唆された。

【研究 I-2】 健常児におけるフィクショナル・ストーリーの発達過程の分析

第1研究では行為間関連付けの量において、行為間を関連付けながら話すという点において発達の差はないと言え、課題においてはフィクショナル・ストーリーの方がパーソナル・ナラティブよりも因果的関連付けを行って語っているといえる。1つの行為と他の行為を関連付けて話すという点において、パーソナル・ナラティブでは関連数に違いが認められなかったが、フィクショナル・ストーリーでは小学校4年生と6年生において違いが認められ、4年生よりも6年生の方が1つの行為から多くの因果的関連付けを行うことが出来るといえる。行為間関連付けの距離において、6年生は4年生よりも距離が長く、時間や空間に隔たりのある行為間を多く関連付けることができた。話の途切れにおいて、4年生のフィクショナル・ストーリー課題で話の途切れが多かった。行為間を関連付けながら話すことを除いて、4年生と6年生では

ナラティブの行為間関連付けに発達的な変化があることが示された。

4年生と6年生の行為間の関連付けの発達的な変化が見られた要因として、認知的な発達と、行為に対する複数の視点の獲得が背景にあると考えられる。認知の発達により、行為間に何が起こったのか推論する力が発達し、絵に描かれていない出来事を推論できるようになったと考えられ、時間的、空間的に隔たった行為間でも関連付けて語ることができたと考えられる。また、1つの行為に対して複数の視点から行為を捉えられるようになったことにより、他者の視点や第三者的視点が行為を多面的に捉えることを可能にし、1つの行為からより多くの関連付けができるようになったといえる。

第2研究では行為間の関連付けの量において、行為間をどれだけ関連付けられているかという点において、発達障害児は健常児よりも行為間を関連づけることに困難があるといえた。課題ではフィクショナル・ストーリーの方がパーソナル・ナラティブよりも関連付けが多かった。1つの行為と他の行為をどれだけ関連づけられているかという点においては、パーソナル・ナラティブで発達障害児は健常児よりも1つの行為と他の行為を関連付けることに困難があるといえた。行為間関連付けの質において、発達障害児は健常児よりも時間や空間に隔たりのある行為間を関連付けることに困難があるといえた。課題では健常児も発達障害児も、フィクショナル・ストーリーの方が時間や空間に隔たりのある行為間を関連付けているといえた。話の途切れについて、発達障害児は健常児よりフィクショナル・ストーリーにおいて話の途切れが多いといえた。また、障害特性による明らかな特性は見られなかった。

発達障害児が健常児よりも行為間の関連付けに困難を示した要因として、自閉症の認知的な特性である central coherence を生物学的な背景とし、時間的に進行していく行為を統合し1つのまとまりをもった意味のあるものとしていくことに困難をもつことが考えられる。また同様に、自閉症児の特性とされている「心の理論」の困難性から、登場人物の意図や心的状態によって行為間を関連づけることを困難にしたと考えられる。これらの要因に加え、ナラティブ活動への参加の制限がナラティブの学習を困難にしていることが、社会的要因として総合的に関連し、行為間の関連付けをより困難にしている可能性が考えられる。

【研究Ⅰ-3】ナラティブの発達アセスメント・ツールの開発のための基礎研究

小学4年生400人にフィクショナル・ストーリーを語ってもらい4年生内の個人差について分析した。その結果、因果的関連づけにおいてクラス間の差が認められた。また、節間関連づけのクラスター分析を行った結果、4つの類型が認められた。

【研究Ⅱ】ナラティブ発達支援プログラムの開発

【研究Ⅰ】の発達データから、アセスメントに基づいた、パーソナル・ナラティブとフィクショナル・ストーリーの発達支援プログラムを作成し、一部試行した。

支援プログラム：A:パーソナル・ナラティブの支援系列：1. 直近の過去経験：「相撲ゲーム」、「すごろくゲーム」などの後、直近の対戦を振り返る。2. 少し前の過去経験：工作や料理の作り方を、見ていなかった大人や友人に説明する。3. 過去経験：「見て、聞いて課題(show and tell)」：週末の出来事を大人や友人に、土産や写真などを手がかりにして語ることを楽しむ。B:フィクショナル・ストーリーの支援系列：1. 親しんだストーリーの印象的だった部分を断片的に大人に語る。2. ストーリーの筋を時間系列や因果関係によって語る。3. ストーリーの登場人物の心的状態を織り込んで語る。

【研究Ⅲ】プログラムの事例への適用：10歳(精神年齢8歳程度)の場面緘黙児Aに対し、ナラティブという観点から発話を促す支援を試みた。パーソナル・ナラティブとフィクショナル・ストーリー支援を並行して行った。指導後期は時系列で接続詞を使って節間関連づけができ、「時間」が50%から75%になった。4枚絵では、接続詞を使った節間関連づけをし、1つの節の長さも長くなり、心的状態語も毎回書いた。このように、ナラティブ支援はAの話す意欲につながり、特に、興味関心に沿ったアニメ等を話題にしたことは有効であった。また、フィクショナル・ストーリーの表現が豊かになるにつれて、パーソナル・ナラティブの内容が豊かになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

(1) 仲野真史・長崎 勤(2012) 幼児期における語りの構造の発達：ケーキ作り経験に関

する報告の分析を通して、発達心理学研究 第23巻1号、66-74。(査読あり)

[学会発表] (計6件)

- ① 鈴木 ゆかり・田尻永里香・長崎 勤 場面緘黙児に対するナラティブ支援—会話と物語作りの支援を通して— 日本特殊教育学会第50回大会発表論文集, 140. つくば国際会議場(茨城県)(2012年9月30日)
- ② 田尻永里香・長崎 勤 小学校高学年のナラティブにおける全体構造の発達の变化—Causal networks 分析を用いて—日本特殊教育学会第50回大会発表論文集, 129. つくば国際会議場(茨城県)(2012年9月29日)
- ③ 渡辺春奈・長崎 勤 健常児童におけるナラティブの発達特性—フィクショナルストーリーの節間関連づけと物語構造の分析を通して— 日本特殊教育学会第50回大会発表論文集, 530. つくば国際会議場(茨城県)(2012年9月29日)
- ④ 田尻 永里香・佐々木 銀河・仲野 真史・長崎 勤 自閉症児への社会的認知発達支援プログラム(12)—好みのアニメを題材にした劇による会話の指導—日本特殊教育学会第49回大会発表論文集, 262. 弘前大学(青森県)(2011年9月18日)
- ⑤ 渡辺春奈・仲野真史・長崎 勤 児童におけるナラティブの発達とアセスメント方法に関する検討—節間の関連づけによる分析を中心にして— 日本発達心理学会第22回大会発表論文集, 252. 東京学芸大学(東京都)(2011年3月26日)
- ⑥ 水野友貴・佐藤由希恵・小林麻里・佐藤義竹・石山めぐみ・中村有希・長崎 勤 自閉症児への社会的認知発達支援プログラム(9)—ホットケーキ作りを通じた協同活動、出来事の語り、情動調整の支援—日本特殊教育学会第48回大会発表論文集, 284. 長崎大学(長崎県)(2010年9月18日)

[図書] (計2件)

- (1) 長崎 勤・藤野博(編著)(2011) 学童期の支援—特別支援教育をふまえて— 臨床発達心理学・理論と実践④293p(pp.8-17) ミネルヴァ書房.
- (2) 長崎 勤(2010) 生活世界の中でのことばの力の獲得と臨床 須田治・秦野悦子・本郷一夫編著 子どもへの発達支援のエッセンス 秦野悦子編著 第1巻 生きたことばの力とコミュニケーション 第6章. 253p(pp.113-132). 金子書房.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長崎 勤

(NAGASAKI TSUTOMU)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：80172518